

詩とことば

* 3月

阿部 公彦

肌触りは心にも影響を与え
る。誰もが何となく気づいてい
ることだ。暖かいものに触れる
と見た人の印象がやわらかくな
る、テディベアを抱くと癒され
る、といった実験結果も

ある。IT革命はさまざま
まな疑似現実を可能にし
たが、情動だけは盲点。

触覚にはどうやら私たちの
「情動的現実」を回復
させる力があるらしい

(仲谷正史ほか『触楽入
門』〈朝日出版社〉)。

皮膚感覚の潜在力は大き
い。皮膚研究者の傳田
光洋によれば、人間社会
のさまざまなシステムを
利用しつつも人が個の尊
厳を保つには、個体の境
界である「皮膚」がきち
んと外界と情報のやり取
りをする必要がある。内
と外の境界から——そこ
で生ずる接触から——

「知」が生まれる(『驚
きの皮膚』〈講談社〉)。

心理学者のジェームズ・
ギブソンが唱えた「アフ
オーダンス」の概念では、

環境は「動物の行為にとって潜
在する意味の海」(佐々木正人
『アフオーダンス入門』〈講談
社学術文庫〉)。ふるまいや感

「情動的現実」を刺激する触覚

情が周囲の与える「意味」への
反応だという発想はまさに皮膚
感覚的ではないか。

詩人は外界との接触到に敏感
だ。今月、とくに触覚性を感じ
たのは韓国のベテラン詩人文
貞姫の詩集成『今、バラを摘
め』(韓成禮訳、思潮社)。「触
らないでください／これは私の
悲しみです／長い間息を殺して
泣き／黄金の時間を潰して作っ
た／これはひとえに私の

ものです」。文字通り接
触を拒否し、装飾も控え
めだが、ずしりと感触が
伝わるのがおもしろい。

昨年の刊行だが、斎藤恵
子『夜を叩く人』(思潮
社)にも独特な接触感が
ある。「はじめから知ら
ないものを見ても／むか
し見たことがあって／忘
れてしまっていたのでは
ないかと思うのは／忘れ
ないでといいながら／ま
つくらな狭い洞穴の中／
石を負い伝い歩きしたひ
とたちが／気配となって
いるからだ」。言葉は静
か。基調は世界の肌触り
のかすかさ、はかなさ。
しかしその微妙な隔絶感
に、詩人の「情動的現実」
が露わになる。「窓辺か
ら／遠い鐘の音が聴こえ
てきます／ここにいるの
です／わたしはだれかに会いた
いような気がして／ちいさな声
をだしていました」

(東大准教授)